

[書評]

岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』, 579+xiiページ, 創文社
1988年11月.

「ホメロスの叙事詩において明らかにされた、小は一行に満たぬ formula から大は詩の全体の構成におよぶ緻密な技法は、口誦詩の長い伝統の存在と、その伝統の強靱さをうかがわせる。このような伝統的文学において、個々の詩人の創造がはたして可能であったかどうか疑わしいとする見解が生じたのも決して不思議ではない」(i^o-z^o).

以上のように述べながら、この「不思議でない」見解にたいして、ホメロスの叙事詩における「詩人の創造」が可能であったということをしめしているのが本書である。

著者は、このために、まず伝統的口誦詩を構成する主要素としての formula (定型句) と typical scene (定型的場面, 類型的場面) をとりあげ、「詩人は....師や先輩の歌を聞いておぼえこれを繰り返し吟誦することによって詩作の技術を修得した」(ii) が、「彼らは師や先輩の歌をそっくり模倣・剽窃したのではなく、これらの歌から学んだ formula などに種々の工夫を加え、あるいは新しい結合を試み、これらの伝統的要素をより洗練されたものにした」(ii) と見なして、「ホメロスにおける formula と比喩の調査」(ii) をなし、「その言語....が間断なく変化していたこと」(iif.) をしめしている。巻末の補論 1. 「formula (定型句) と独創性」、補論 2. 「比喩の言語」がそれである。

補論 1. においては、ホメロスの詩が完全に formula 的であり、これまであらわされなかった概念のためにホメロスが言葉を新たに探すことはけっしてなかったのだから、文体についての独創性の問題はホメロスの念頭にはまったくなかったというパリの主張にたいして、詩人が前後のコンテクストに応じて取捨選択をし、新しい工夫と改変を試みたことが具体例をあげて的確にしめされている。

補論 2. では、 比喩を引き出す言葉の緻密な検討により、 ホメロスの時代においては比喩の言語もたえず変化しており、 じっさいに詩をつくりながら吟誦した詩人による新しい工夫がそこに見られることがしめされ、 extension (拡大) をともなうホメロスの比喩が後代の挿入であるということも否定されている。 これは納得のいく主張である。

つぎに注目されるのは、 トロイア戦争のみならずその他の多くの伝説が当時すでに歴史性をそなえていたから、 聴衆が新しい詩においてもこの歴史性がまもられることを期待したということ、 またこのために、 詩作も、 自ずから一定の枠をはめられ、 まったく新しい内容のものをその対象にすることができなかつたから、 詩人は伝統的物語の再解釈とこれを可能にする物語技法の洗練に精力を注いだということである。 第1部にこのことが論述されている。

第1部第1章「ホメロスの独創性」では、 木馬の計略によってオデュッセウスが トロイアを攻略したとする伝統的物語において彼が「城市を滅ぼす (ptoliporthos) オデュッセウス」といわれているのにたいして、『イリアス』の詩人がアキレウスをトロイアの攻略者とする詩を作り、 彼を「城市を滅ぼすアキレウス」といったのだという主張が説得的にされている。

すなわち、『イリアス』においては、ヘクトルがトロイアの唯一のまもり手とされるのに対応して、アキレウスがギリシア軍の唯一のまもり手とされていること、そしてこの結果必然的に生じる彼らの間の対決においてヘクトルを倒したアキレウスがトロイアの攻略者となっていることが、『イリアス』の緊密な筋の展開を丹念に検討することによって明らかにされているのである。さらに、アキレウスの死とトロイア陥落の「同時性」およびアキレウスとヘクトルの運命の共通性からも、「トロイア攻略者アキレウス」が『イリアス』の詩人によって創造されたのであるということが指摘されている。

第1部第2章「パトロクロスの死」においては、『イリアス』におけるパトロクロスの死とアキレウスの死との綿密な比較から、アキレウスの死におけるアポロンとパリスは、『イリアス』のパトロクロスの死においてアポロンとヘクトルという形であらわされているが、そこでは変装とそれにともな

う発見というありふれたモチーフがみごとに叙事詩化され、新しい詩的な生命が与えられていることが精細な分析のもとに述べられている。

第1部第3章「アキレウスの怒り」では、クリュセイスとブリセイスをめぐる争いの結果生じるアキレウスの怒り——詩人はこれを『イリアス』のテーマにすえ、筋を一貫させて話が散漫になるのを防いでいる——そのものが、ヘレネ誘拐の物語にもとづき、これをモデルとして構想されたことを推定させること、さらにヘレネの誘拐とその結果が『イリアス』全体にわたって想起、予言、予感、対比、パラレル、エピソード等の形で反映されていることが説得的に論じられている。

第1部第4章「叙事詩と民話」は、かつての民話の主人公がトロイア戦争の英雄となり、さらにアトレイダイを中心とするギリシア軍の帰国と結びつけられこれと対比されることにより、『オデュッセイア』が新しい叙事詩の世界になっていること、すなわちアガ멤ノンをはじめ他のギリシアの英雄たちの帰国が語られることにより、『オデュッセイア』が民話に見られる帰国者の物語の域を脱し、たんにオデュッセウスの帰国の物語となるばかりでなく、同時にまた「アカイア軍の帰国」の叙事詩に発展したのであり、またこのような発展こそ叙事詩を民話から根本的に分けるものであることを指摘している。

第1部第5章「オデュッセウスとテレマコス」においては、トロイアにおける木馬の計略は古くからオデュッセウスについて伝えられた物語であること、彼の本質は *dolos* にあるが、その *dolos* は『イリアス』と『オデュッセイア』ではホメロスの英雄にふさわしい形にかえられ、*polytlas* という epithet に見られるように、*dolos* の遂行における忍耐力、沈着などの面が強調され、また *dolos* の知的な面がすぐれた弁論家、戦術家という形でしめられていることが述べられている。そしてこの知略を得意とする伝統的英雄において、*dolos* がたんに求婚者たちに向けられるのみでなく、さらに全編を通じてオデュッセウスとテレマコスを精神的に結びつけるきずなどとして用いられた点に『オデュッセイア』の詩人による独創的改変が認められるという主張がされている。

第1部第6章「弓競技」は、英雄としてのオデュッセウスの帰国は元来ト

ロイア伝説の枠内においてギリシア軍の帰国の一環として語られており、それが、アルゴ船や弓競技による求婚者殺戮の物語と結びつけられることにより、現在見られるような叙事詩に発展成長したのであるということのを的確に論じている。

第1部第7章「求婚者殺戮とオルソテュレ」は、求婚者殺戮における弓の戦いが民話的要素であり、剣と槍による戦いおよび息子テレマコスとオルソテュレが英雄叙事詩の要素であり、エウマイオスとピロイティオスが『オデュッセイア』の詩人の要素であるということのをきわめて論理的にしめしている。

このあと著者は、叙事詩の環の詩、とくにトロイア圏に属する詩とホメロスの両叙事詩を比較考察することにより、伝統的要素と詩人自身の創造をより広い視野にたつて捉えるばかりでなく、ホメロスおよび彼の前後の時代において現存の二大叙事詩と叙事詩の環の詩に結実した創作活動の展開をより克明にあとづける。さらに著者は、詩作上の原理ともいえる、伝統的物語の全体をつねに視野に収め同時にその一部分のみを取りあげて語る手法が、ホメロスの詩と叙事詩の環の詩に共通して認められるのは、『イリアス』と『オデュッセイア』がけっして特殊な例ではなく、当時の叙事詩の一般的性格をそなえた詩であったことをしめしていることを力説する。そこで著者は、ホメロスの独創性をむしろ伝統の再解釈、洗練と、これにもとづくアキレウス、ヘクトル、オデュッセウスなどの伝統的英雄像の変容にもとめるのである。そして彼は、ホメロスにおける伝統を理解するということは、ホメロス自身の創造を理解するということになるのであるという。以上のことを論じているのが、本書の中心部をなす第2部の「ホメロスと叙事詩の環」である。だが第2部は11章343頁におよぶ大部なものであるから、叙事詩の環の詩と『イリアス』との比較の一例をしめして、著者の手法を紹介するにとどめたい。以下がその例である。

著者は、第2部第1章『キュプリア』3「パリスの審判」において、『イリアス』の解釈の結果、『イリアス』のいくつかの箇所が「パリスの審判」を前提としていることがあきらかになったが、直接の言及は一箇所 24.28-

30 のみであること、一方『キュプリア』が「パリスの審判」をかなり詳細に語っていたことを指摘する。そしてこの点から、彼は、『キュプリア』の詩人がこのエピソードを『イリアス』の箇所における言及にもとづいてそれを発展させる形で語ったのではなく、『イリアス』以前からすでに明確な形で伝えられていた伝承、それも『イリアス』自体が前提とするところの伝承にもとづいて語ったという。さらに彼は、『イリアス』の詩人も、この伝承にもとづいてアプロディテ、パリスおよびトロイア人にたいするヘラとアテナの憎悪を描いており、第5歌ではアテナとディオメデスの活躍のエピソードを、また第21歌ではこのエピソードとのパラレルとしてアテナとアレスの戦いを創造したのであると主張している。

最後に著者は、補論3.「ホメロスと文字」において、『イリアス』『オデュッセイア』は、前8世紀の後半に活躍した口誦詩人ホメロスがたえず想を練り、繰り返し口演することによって、その技法をより洗練されたものにし、より統一された構成の詩につくりあげたという。また彼は、統一された緻密な構成の詩は、単純な詩に比較して、たとえ口頭で伝承されたとしてもより容易に固定された形を保つことが可能になったと考える。そして彼は、詩のなかに見いだされる社会的文化的要素のうちもっとも新しいものが前8世紀末頃のギリシア世界を反映するのにたいし、その後の時代の激動がほとんど影を落としていないこと、さらにその言語が、formula や比喩などに看取されるごとくたえず変化しつつあった事実をしめす反面、テクストの伝承の過程において生じたと思われる挿入、誤記、変形などを除きほぼ前8世紀の形態を忠実にとどめていることから、『イリアス』と『オデュッセイア』は成立後かなりはやい時期に——おそらく詩人の在世中にまたは死後まもなく——文字によって固定され、ホメロスの名によって権威づけられたテクストの形で後世につたえられたと見ている。

『イリアス』『オデュッセイア』が広く深い伝統を基盤にして成立し、しかもその手法を当時の他の叙事詩と共通にしておりながら、当時の叙事詩人たちに大きな衝撃を与えると同時に、この両叙事詩だけが、完全な形で後世

につたわっている理由はどこにあるのかということが、本書によってあきらかにされたと思う。が、これは、著者がもっている全体を見とおす視野と細部を見おとさない注意力、それと彼の大胆で細心な手腕によってのみなされることである。また本書から読者は多くのことを学ぶのであるが、そのなかでもっとも肝要なことといえ、本書の標題がしめすように、伝統の継承のなかにおいてホメロスの創造性を見いだそうとした著者の態度そのものであろう。そしてこれを実現した著者の手法は、「西洋古典学」における「文学研究」のあり方をわれわれにしめしているといえる。

松本仁助

松本仁助『ギリシア叙事詩の誕生』，233+xiページ，世界思想社 1989年12月。

古今東西の傑出した作家にはたいてい謎が多いが、ホメロスはその謎が最も多い詩人の一人であろう。第一、『イリアス』『オデュッセイア』の両叙事詩はホメロスの作といわれているが、それ自体不確定的な要素を多くはらんでいる。また両詩篇の成立はほぼ紀元前8世紀後半と推定されてはいるものの、なぜそのような歴史上の「暗黒時代」にかくも巨大な叙事詩が作られたのか、さらにはどんな方法で創作され伝承されたのか、まるでストーンヘンジを眼の前にして問いかける謎のようだ。しかしストーンヘンジのような太古の遺跡とホメロスの記念碑的作品との決定的な違いは、後者がことばの産物だということである。ことばは、語りつぐ人がいなければすぐに消滅するが、受け継がれる力を内蔵していれば、一定の用途のために作られた石の物体とは異なり、ほとんど無制限の使用に耐える。じじつ、ホメロスはみずから創ったそのことばの記念碑で、古代ギリシア人の言語文化を比類なく豊かにし、しかもその後のヨーロッパの言語芸術にもはかり知れない影響を与えた。要するに、ホメロスはおそらく紀元前8世紀末ごろに死んだのに、そ